

水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準の設定に関する資料

トルフェンピラド

1. 評価対象農薬の概要

1. 物質概要

化学名	4 - クロロ - 3 - エチル - 1 - メチル - N - [ 4 - ( p - トリルオキシ ) ベンジル ] ピラゾール - 5 - カルボキサミド				
分子式	C <sub>21</sub> H <sub>22</sub> ClN <sub>3</sub> O <sub>2</sub>	分子量	383.9	CAS NO.	129558-76-5
構造式					

2. 作用機構等

トルフェンピラドはピラゾールカルボキサミド骨格を有する殺虫剤であり、その作用機構は主にミトコンドリアにおける電子伝達系複合体 を阻害することによるものと考えられる。本邦での初回登録は 2002 年である。

製剤は水和剤及び乳剤が、適用作物は果樹、野菜、花き等がある。

原体の国内生産量は、48.1t ( 20 年度 )、10.4t ( 21 年度 )、24.0t ( 22 年度 ) であった。

年度は農薬年度 ( 前年 10 月 ~ 当該年 9 月 )、出典 : 農薬要覧 - 2011 - ( ( 社 ) 日本植物防疫協会 )

3. 各種物性

外観・臭気	類白色粉末、無臭	土壌吸着係数	$K_{F_{OC}}^{ads} = 15,000 - 150,000$ ( 25 )
融点	87.8 - 88.2	オクタノール / 水分配係数	$\log Pow = 5.61$ ( 25 )
沸点	250 以上で分解のため 測定不能	生物濃縮性	$BCF_{ss} = 10$ ( 0.1 $\mu\text{g/L}$ ) < 57 ( 0.01 $\mu\text{g/L}$ )
蒸気圧	$5 \times 10^{-7}$ Pa ( 25 )	密度	1.2 $\text{g/cm}^3$ ( 25 )
加水分解性	半減期 1 年以上 ( pH4、7、9 : 25 )	水溶解度	87 $\mu\text{g/L}$ ( 25 )

水中光分解性	半減期 35.2 時間 (東京春季太陽光換算 11.4 日) (滅菌蒸留水、25℃、765W/m <sup>2</sup> 、300-800nm)
	35.0 時間 (東京春季太陽光換算 11.3 日) (自然水、25℃、765W/m <sup>2</sup> 、300-800nm)

## 水産動植物への毒性

### 1. 魚類

#### (1) 魚類急性毒性試験 (コイ)

コイを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96hLC<sub>50</sub> = 2.9 μg/L であった。

表1 コイ急性毒性試験結果

被験物質	原体					
供試生物	コイ ( <i>Cyprinus carpio</i> ) 10尾/群					
暴露方法	半止水式 (暴露開始 48 時間後に換水)					
暴露期間	96h					
設定濃度 (μg/L)	0	5.0	7.0	10.0	14.0	20.0
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	2.3	3.4	5.9	9.2	16.8
死亡数 / 供試生物数 (96hr 後 ; 尾)	0/10	2/10	7/10	10/10	10/10	10/10
助剤	DMSO 0.04ml/L (使用した最高濃度)					
LC <sub>50</sub> (μg/L)	2.9(95%信頼限界 2.3-3.6) (実測濃度(有効成分換算値)に基づく)					

### 2. 甲殻類

#### (1) ミジンコ類急性遊泳阻害試験 (オオミジンコ)

オオミジンコを用いたミジンコ類急性遊泳阻害試験が実施され、48hEC<sub>50</sub> = 0.99 μg/L であった。

表2 オオミジンコ急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体						
供試生物	オオミジンコ ( <i>Daphnia magna</i> ) 20頭/群						
暴露方法	止水式						
暴露期間	48h						
設定濃度 (μg/L)	0	0.30	0.50	0.90	1.60	2.80	5.00
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	0.29	0.48	0.88	1.70	2.84	4.66
遊泳阻害数 / 供試生物数 (48hr 後 ; 頭)	0/20	0/20	0/20	12/20	15/20	20/20	20/20
助剤	DMSO 0.01ml/L						
EC <sub>50</sub> (μg/L)	0.99(95%信頼限界 0.83-1.18) (実測濃度(有効成分換算値)に基づく)						

### 3 . 藻類

#### ( 1 ) 藻類生長阻害試験

*Pseudokirchneriella subcapitata* を用いた藻類生長阻害試験が実施され、  
72hErC<sub>50</sub> > 430 μg/Lであった。

表3 藻類生長阻害試験結果

被験物質	原体					
供試生物	<i>P. subcapitata</i> 初期生物量 $1 \times 10^4$ cells/mL					
暴露方法	振とう培養					
暴露期間	72 h					
設定濃度 ( μg/L )	0	100	180	320	560	1,000
実測濃度 ( μg/L ) ( 時間加重平均値 )	0	50	90	130	250	430
72hr 後生物量 ( $\times 10^4$ cells/mL )	209	216	231	204	181	184
0-72hr 生長阻害率 ( % )		-0.6	-1.9	0.5	3.0	2.4
助剤	DMSO 0.01ml/L					
ErC <sub>50</sub> ( μg/L )	> 430 ( 実測濃度 ( 有効成分換算値 ) に基づく )					
NOECr ( μg/L )	> 430 ( 実測濃度 ( 有効成分換算値 ) に基づく )					

・環境中予測濃度（PEC）

1．製剤の種類及び適用農作物等

本農薬は製剤として水和剤及び乳剤が、果樹、野菜、花き等に適用がある。

2．PECの算出

(1) 非水田使用時の水産PEC

非水田使用農薬として、水産PECが最も高くなる使用方法について、下表のパラメーターを用いて第1段階の水産PECを算出する。

表4 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター  
(非水田使用第1段階：地表流出)

PEC算出に関する使用方法		各パラメーターの値	
剤型	15%水和剤	$I$ ：単回の農薬散布量（有効成分 g/ha）	1,050
農薬散布液量	700L/10a	$D_{river}$ ：河川ドリフト率（%）	3.4
希釈倍数	1,000倍	$Z_{river}$ ：1日河川ドリフト面積（ha/day）	0.12
地上防除/航空防除	地上	$N_{drift}$ ：ドリフト寄与日数（day）	2
適用作物	果樹	$R_u$ ：畑地からの農薬流出率（%）	0.02
施用法	散布	$A_u$ ：農薬散布面積（ha）	37.5
		$f_u$ ：施用法による農薬流出係数（-）	1

これらのパラメーターより非水田使用時の環境中予測濃度は以下のとおりとなる。

非水田 $PEC_{Tier1}$ による算出結果	0.017 $\mu\text{g/L}$
---------------------------	-----------------------

## . 総合評価

### (1) 登録保留基準値案

各生物種の  $LC_{50}$ 、 $EC_{50}$  は以下のとおりであった。

魚類（コイ急性毒性）	$96hLC_{50}$	=	2.9	$\mu g/L$
甲殻類（オオミジンコ急性遊泳阻害）	$48hEC_{50}$	=	0.99	$\mu g/L$
藻類（ <i>P. subcapitata</i> 生長阻害）	$72hErC_{50}$	>	430	$\mu g/L$

これらから、

魚類急性影響濃度	$AECf = LC_{50}/10$	=	0.29	$\mu g/L$
甲殻類急性影響濃度	$AECd = EC_{50}/10$	=	0.099	$\mu g/L$
藻類急性影響濃度	$AECa = EC_{50}$	>	430	$\mu g/L$

よって、これらのうち最小の  $AECd$  より、登録保留基準値 =  $0.099 (\mu g/L)$  とする。

### (2) リスク評価

環境中予測濃度は、非水田  $PEC_{Tier1} = 0.017 (\mu g/L)$  であり、登録保留基準値  $0.099 (\mu g/L)$  を下回っている。

### < 検討経緯 >

2012年7月13日 平成24年度第2回水産動植物登録保留基準設定検討会